



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.115

2013.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## ● 神村 透

## 田舎考古学人回想誌

30

## 「研究所・研究会・講演と積極的に顔を出す」

市川市国府台の日本考古学研究所は高校生の時、郷土班の先輩矢沢正安さんに案内された場所の一つでした。この時対応されたのが篠遠喜彦さんでした。お父さんが諏訪出身とのことで信州人の私たちに親切でした。調査中の縄文前期二ツ木貝塚を訪ねた。2m近い深さの貝層に驚いた。採集した貝や土器は下伊那教育会教育参考館に保管されている。吉崎昌一さんが市川市に住んでいたため西川宏・戸沢充則さんと日本考古学研究所を訪ね篠崎さんに会う。夜、吉崎さん宅で篠崎さんも加わって語った。翌年、篠崎さんがハワイに転居されたとき送別会に参加した。

元兵舎だった市谷の資源研究所は岡本勇さんが連れて行ってくれた。和島誠一先生のところに集う近藤義郎・市原寿文・今井暁さんらと親しくなる。学生では早大清水登美恵さんがいた。帰郷の時私は東海道線回りで島田市に途中下車し清水さん宅を訪ねた。後に清水さんは立命館大田辺昭三さんと結婚した。田辺さんとは大学1年の時愛知県大根平遺跡調査の時、久永春男先生の弟子たちとすることで田辺さん・芳賀陽・私が参加した。不思議な縁を思った。特に親しくなったのは近藤さんで、大学2年時、大学文化祭『日本農耕文化の起源』展示で岡本さんの勧めで下伊那段丘地帯の弥生陸耕を示す打製石器群を並べた。近藤さんはそれを見て『世界考古学大系』の「農具のはじまり」の中でふれた。この縁で『日本考古学の諸問題』に「飯田地方における弥生時代打製石器」の投稿となった。また、月の輪古墳の調査は



▲1952年7月20日～26日 大根平遺跡

学生たちに強い関心を引き、東京での『月の輪古墳』試写会は学生たちで一杯だった。合評会もみんな興奮していた。私も発表し和島先生から褒められた。

日本考古学協会も東京で開催されその都度参加した。会場で有名な学者をみて興奮したり、知った方と話したり、特に遠くからの出席者が懐かしかった。55年の協会では集まった若手研究者で会をと、前日 私も協力して会員名簿を作成し200人近かった。手元に会員名簿残っていないのが残念である。

縄文文化研究会は最初 テーマに沿って発表し検討する会でした。在京の若手研究者を中心に大学生たちが集まって、会場は各大学持ち回りで持った。私も学生の一人として参加しいつも興奮のひとつでした。押型文土器のときは発表者の一人にもなった。この会が発展し全国的に仲間が参加し『石器時代文化研究会』で、1957年現在59名の会員がいた。私もその一人で、33人とは親疎の差はあるが話したことがある。『石器時代』4号に『長野県立野遺跡の捺型文土器』を私は報告した。

東京の良さは学者たちの講演を聴けることでした。講師と講演名の記録は少ない。山内清男『晩期の諸問題』(メモあり)、杉原荘介『縄文土器と弥生土器との関係』(メモあり)、江坂輝弥『縄文文化の始源』、杉原荘介『弥生時代年代決定に関する新見解』等がノートにメモされている。他に丸茂先生・後藤先生の講演も聴いている。積み石塚や装飾古墳の講演も聴いているがどなたのかは記憶にない。

資源研で知ったのか地学団体研究会の関東ローム団研の野外巡検にも参加している。考古学の学生は私一人でした。始まったばかりの53年10月11日と25日の二回。新宿駅西口に集合。武蔵野段丘崖と多摩丘陵の露頭を終日追った。武蔵野ではローム中から黒曜石剥片を採集した。指導者は井尻正二さんで魅力的な研究者でファンになった。著書を全部買って読み、特に『科学論』は私の卒論の方法論の元になった。私の方法論は付け焼刃の粗末な内容でしたが勉強になった。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

■田舎考古学人回想誌	研究所・研究会・講演と積極的に顔を出す	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第108回) 大矢祐治 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第9回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『蘇える弥生』ドキュメント田和山遺跡訴訟 遠部 慎 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第9回)

石井 則孝

## 《東京に縄文博物館を》

## はじめに

関東六県・東北六県どこをさがしても縄文博物館はない。強いてあげれば、青森県の三内丸山遺跡にある博物館、長野県尖石遺跡に設置されている資料館、そして千葉県加曾利貝塚の加曾利貝塚博物館ぐらいではないだろうか。日本の考古学全体を考えた時、世界の考古学研究者が日本の考古学に対して最も関心を持っている時代は、私が経験してきた中では縄文時代なのである。

## — 1 —

かつて東京都埋蔵文化財センターに勤務していた時、多摩ニュータウン遺跡群の調査に当たっていた。遺跡のほとんどは縄文時代が多く、それも中期から後期初頭にかけての集落遺跡が主流で、粘土採掘坑や陥し穴の発見は忘れられない遺構として今も頭の隅に残っている。特にNo72遺跡の大集落は、史跡に値する遺跡であったが、ほんの一部だけを残して消滅してしまった。

東京国立博物館や奈良国立文化財研究所を訪ねるために来日した研究者が東京に来るとその何人かは多摩ニュータウン遺跡群の発掘現場を見学するために私のところへ現われた。その多くの方々には、縄文時代の住居跡の見学と土器群の観察であった。

エジプト考古局の女性次長が来られた時、めったに発見されない縄文時代早期の竪穴住居が四軒ほど検出された現場に案内した際、不思議な顔をされて見ていた姿は忘れられない記憶として残っている。ともかく、フランス、ドイツ、ロシア、アメリカからの学者のほとんどは、縄文時代に強い関心を持っていたと実感している。

## — 2 —

中国西安市から来日されて、日本考古学を6カ月にわたって研究していた焦 南峰氏は多摩市に居を構え、毎日のように私のところに来ていた。そのうち作業員の婦人たちとも親しくなり、中国語の勉強会も始めるようになり日中合同研究会も出来るようになった。やはり焦 南峰氏の関心は縄文時代にあったようで、今は亡き千野裕道君と大変親しい仲となっていた。

6年ほど前、西安市を訪れた際、焦 南峰氏にお会いした。西安市考古局のトップに上っていた。多忙ゆえ、翌日我が夫妻に遺跡を案内できる運転手を差しむけてください、始皇帝墓ではない最新発見の遺跡を終日にわたって見せていただいた。研究者同志の交流には世界の壁は無いと今も忘れられないすばらしい恩情として感謝している。

ともかく、都埋文在職中にどれほどの外国のお客様と会ってきたことか。これは笑い話であるが、3回来所されたロシアの研究者は「お土産にウォッカを持っていきます」といつも約束して帰っていったが、3回共空きビンを持って現れたのには今もあきれた話として残っている。埋文センターに今も空きビンが残っているはずである。

一般の人々にとっても研究者にとってもいわんや外国人にとっても東京では一カ所にとどまって研究できる縄文時代の博物館・研究機関はない。これが現状である。

## — 3 —

東京にある縄文時代の大遺跡をさがすと、平成の時代

(2010年代)に入っても、大集落として発掘が続けられているのが三鷹市の第五中の敷地となっている中期の大集落と西東京市の東伏見に所在している双環状に住居がめぐる下野谷遺跡である。南関東最大の集落遺跡で石神井川の南側台地上に所在している。石神井公園の南側の台地に所在した扇山遺跡に連なるもので、この扇山遺跡を歩くと昭和20年代の後半頃は、ザック一杯の石斧・石皿などを採集することができた。滝沢浩さんが存命されていたならば、その頃の武蔵野台地の縄文時代の様相を語ってくれることだろう。彼の採集した遺物は今どうなっているのだろうか…。

なぜ都会では遺跡を残せないのか。土一升金一升の世界であるからなのか。東京に残る三鷹市と西東京市の縄文時代大集落は最後の砦である。この2つの遺跡に都民に限らず多くの人々に関心をもっていただき、なんとかしたいと考えているのが現状である。

## — 4 —

縄文研究者の減少が顕著になってきた平成の時代、どうしたらいいのか。私の周辺を見廻してみると、金子浩昌・和田哲・小林達雄さんたちの高齢化、柿沼修平・堀越正行・安孫子昭二さんらの停年。若手とは云えなくなってきた小葉一夫・丹野雅人・山本孝司・小林謙一・倉田恵津子・西沢明さんらに期待するしかない。縄文研究者の減少はどういうことなのだろうか。日々の研究で遺跡が無くなっていったことなのか。弥生・古墳時代というモニュメント的遺跡は、中国・朝鮮半島との交流史も伺えるという研究の広さなのか。今の若者の思考の差なのだろうか。私の少年時代を思い起す時、そこに川があれば、南側の台地には遺跡があり、土器や石器を拾うことができた。私の住んでいる鷺宮には、妙正寺川が流れ、目の前に連なる緑の林が残り、その天神山を歩くと今でも石器を採集することができる。東京における住宅地の開発は、緑を消し遺跡をも消滅させていった。

小学校6年生の時、先生から「その丘を歩くと大昔の人々が使った土器や石器を拾えるよ」この言葉が私の考古学への関心の第一歩であったと思う。ラスコーの洞窟壁画の童話を読んだ時の不思議さも刺激になったのかも知れない。

滝沢浩さんを知った時、文化財保護法の制立以前だったので、武蔵野台地の土器の採集ができることや千葉県の貝塚へ滝沢さんに連れられて出掛けていた。今でいう盗掘というものを知った。リング箱にたまった土器片を、父から「こんなものどうするんだ!!」と道路へまかれたこともあった。

## — 5 —

今から20年前ぐら  
いまでは、「縄文人展」とか「弥生人展」とかのテーマでデパート展も盛んに行なわれていたが、今や時代の変化は大きくスーパーマーケット・コンビニの出現によって大手デパー

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

トも文化的催事を行う余裕もなくなり、東京駅の大丸デパート・新宿駅の小田急デパートで催された考古学史に残る「考古学展」は過去の記憶として残るばかりである。江戸博オープンの時、一階の広い空間でオープニングセレモニーを計画したが、隅田川からの吹きつける強風によって中止せざるをえなかった。現在でも、広い空間は何物にも使われていない。何回か現役時代に建物を困って縄文博物館を造ってはと提案をしてきたが、設計者が絶対許さないということで(デザインの破壊)話は止ったままである。今年1月にリニューアルした都美術館。パリアフリーの問題から内部改築の変更は許されたが外観は手出しが出来な

かった。設計者と都との間にどういう取引があったかを知りたいところである。

### おわりに

どうしたら東京に縄文博物館を造ることが出来るのだろうか。「日本に縄文博物館を建設しよう」の大運動を起こそうと考えているが、現役を離れた現段階では限界がある。この「アルカ通信」の執筆陣のメンバーはみな建設的なので、何とか私の考えに賛同していただき、この難問のコタエを出していただけないだろうか。第五中と下野谷は未だ存在している。何とかしたいと考えている日常である。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## レイエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 108

## 日根荘遺跡 ～ 大阪府泉佐野市

大矢 祐司

恥ずかしい話だが、私は泉佐野市で嘱託職員として働くまでほとんど中世への関心が無かった。自治体史は弥生～古墳時代を中心に読み、中世以降に関しては目を通していないような人間だった。そんな私が中世以降の歴史や地域史に関心を持つようになったのは日根遺跡とそれに関連する遺跡群のおかげである。

日根荘遺跡の所在する泉佐野市は大阪府南部の泉南地域に位置し、北西は大阪湾に面し東南是和泉山脈に面した東西に細長い形で面積は約50km<sup>2</sup>である。関西国際空港の玄関口といえれば泉外の方にはおおよその位置は分かってもらえるであろうか。

日根荘遺跡は泉佐野市日根野と大木に点在する15地点からなる荘園遺跡で、平成10年(1998)に14地点が国指定史跡となり、平成17年(2005)に長福寺跡が追加指定を受けている。

和泉国日根荘は藤原兼実の孫である九条道家によって天福2年(1234)によって立件され、天文年間(1532～1534)まで存在した。成立期の範囲は現在の泉佐野市長滝周辺を除いた泉佐野市域全域に相当するが、その後武士の台頭により少しずつ範囲を狭めていく。そして、戦国時代には和泉国守護細川氏と根来寺との対立に巻き込まれて日根野村の一部と入山田村(現在の大木と土丸)のみとなり、最後には根来寺の支配下となり終焉を迎える。

当時の日根荘を知る上で重要な資料としては絵図と日記がある。絵図は荘園開発の為に作成された正和5年(1316)の「日根荘日根野村荒野開発絵図」と1300年頃の「日根荘日根野村・井原村荒野開発絵図」である。日根荘遺跡を構成する日根野所在の9地点については絵図と対照が可能である。日記は文亀元年(1501)に荘園経営の立て直しを図り日根荘に下向し直接支配を試みた前関白九条政基が記した『政基公旅引付』である。そこには、戦国時代初期の村の生活が書かれており、特に政基が4年間滞在了入山田村の人々の日常生活や祭礼、起こった事件については詳細に記されている。

上記の絵図や日記を中心とした史料が基となり日根神社・慈眼院・総福寺・野々宮跡・新道出牛神・二谷池・八重治池・尼津池・井川・長福寺跡・火走神社・円満寺・毘沙門堂・蓮華寺・香積寺跡の15地点が選定されているわけであるが、日根荘が存在した中世の姿をとどめているものはごく一部である。社寺に関しては文永8年(1271)に建立された慈眼院の金堂(重要文化財)と多宝塔(国宝)以外は近世以降のものであるし、溜池や用水路に関



日根荘遺跡長福寺跡(2013年3月現在)

してもほとんど近代的な作りに改修されてしまっていて、すぐに当時の姿を想像するのは難しい。

長福寺跡は指定地点で唯一発掘調査が行われている場所であり、唯一公有化されている場所でもある。長福寺は九条政基が日根荘の直接支配のため4年間滞在して政所として使用した寺院である。『政基公旅引付』において長福寺に関する記述は多く、屋敷・堂・御庭、番所、井戸、鎮守天満宮、火焼所などの施設名称が記されている。

発掘調査では15～16世紀の方形区画内に石敷遺構を伴う三間堂と池の跡が見つかっており、瓦や輸入陶磁器とともに基石や差込錠、青銅製環金具などの特異な遺物が出土している。『政基公旅引付』には政基が読経を行ったり村人が庭先で念仏踊りを披露した場所として「堂」が登場するが、それはこの三間堂である可能性が高い。またこの堂の南には庭に伴うであろう池跡が見つかる。

日根荘遺跡は複数地点で構成されていることと荘園といった馴染みにくいテーマを持つ史跡であるため、見学者が現地でも説明版を一読してすぐに理解して感心するような史跡ではない。領域型荘園の特性上、構成要素である指定地点15か所とそれ以外の集落・社寺・字名・灌漑・石造物・墓地などに少しずつ残された中世の面影を発掘調査成果・古文書・絵図などで補強して想像を膨らませながら市内を巡ることで初めて理解できて楽しめる史跡である。

ちなみに発掘調査の成果としては、榎井西遺跡や森山遺跡の方形居館、上町遺跡と日根野遺跡での方形区画を持った屋敷群、上町東遺跡の鍛冶や櫛作りの職人の集落、檀波羅密寺跡の中世寺院などがある。いずれの遺跡の場所も近年の開発により田園

風景をみることはほとんどできない。

在職していた最後の年には、新たな追加指定のための調査にもわずかだが参加させてもらった。泉佐野市と熊取町にまたがる土丸・雨山城という南北朝期～戦国期の山城で4つの曲輪群と城以外の機能を持った平坦面で構成される分散型城郭である。城からは日根荘と大阪湾を一望することができ、紀伊国と河内国へと抜けるルートを抑えることのできる場所に立地している。泉州ではこれより巨大な山城は貝塚市の根福寺城くらいしかない。この山城が追加指定となり日根荘の魅力が更に増してくれ

れば思う。

私は現在他市で文化財の仕事に携わっているが、現代にいたるその地域の歴史について考えようとすぐに思えたのは日根荘遺跡とそれに関連する遺跡群に関わった5年間のおかげである。

このエッセイを読まれた県外の方が関西国際空港を利用して大阪に来られた際には、そのまま目的地に直行せず泉佐野市内を散策し中世日根荘の名残を探した後犬鳴温泉で旅の疲れを癒していただければ幸いです。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは森下真企さんです。

## 考古学者の書棚

### 『蘇える弥生』ドキュメント田和山遺跡訴訟

高野孝治／今井書店(2001)

遠部 慎

日本における遺跡保護を考える上でも、『遺跡保存を考える』(1994)は不朽の名作といえよう。この本を執筆した椎名慎太郎氏は法学的な立場から、文化財保護について数多くの著作があることで知られる。椎名氏はそれらの著作の中で繰り返し、静岡県浜松市伊場遺跡のような事例を繰り返すことのないよう強く訴えたことは、今さら筆者が述べるまでもない。

では、伊場遺跡で訴訟にまでなった文化財保護を巡る思いは、21世紀に継承されているのであろうか。確かに、様々な文化財保護活動が展開され、現代社会とのかかわりも含め、多様な議論が行われており、それらを巡る情報量そのものについては、おそらく伊場遺跡の頃とは隔世の感があるのかもしれない。

遺跡を廻る情報量が日々増えていく時代ではあるが、あふれる情報の渦にのまれ、埋もれていく遺跡が多いことは否めない。私自身の体験に照らしても、遺跡のことを一般に周知することについては、その手法をはじめ、課題が多いことは身にしみているつもりだ。そうした中、遺跡を守るための手段として、様々な方法を学ぶ機会も少なくない。

「訴訟」もその1つだ。しかし、考古学、発掘、特に「遺跡」に関連して「訴訟」が起こること自体、少ない。それは実際に困難であることは、訴訟を担当する弁護士での言葉を、借りればよくわかる。今回紹介する『蘇える弥生 ドキュメント田和山遺跡訴訟』は、弁護士の目を通して見た、遺跡保護活動および裁判に至った一連の経緯についての著作である。その中で披露される言葉は強烈で、改めて文化財を巡る厳しい状況を感じざるを得ない。

『蘇える弥生 ドキュメント田和山遺跡訴訟』の著者である高野孝治氏は1943年島根県生まれの弁護士で、1971年から弁護士活動を開始し、青木遺跡(米子市)の訴訟についても関わっている。また、『風太郎の花物語一花の不思議が見えてくる』(1994)、『島根の原発』(2011)という著作もある。

『蘇える弥生』の中で高野氏が、考古学者の相談を受けた際に、当初述べたというくだりは強烈だ。「遺跡を裁判によって守る?それは無理だ。裁判で勝てる見込みはない。文化財保護法などという法律は、裁判ではほとんどなんの役にも立たない。法や裁判に頼って遺跡を守ることは不可能である」

そして、この言葉が吐露された舞台は、著名な島根県松江市田和山遺跡なのである。おそらく、田和山遺跡についての説明は多くは必要ないと考えるが、そのような弥生時代の「史跡」でさえも、いわゆる遺跡について詳しくない一般の弁護士の目からは、

このような感想を抱かせる現実を、重く受け止めざるを得ない。

高野氏が田和山遺跡に関わって5年もたない期間で、「国史跡」としての評価が定まり、遺跡は保護されることにつながっていく。また、保存運動にかかわった市民が参加する形で、遺跡整備案の作成が進められていく。この特筆すべき状況についてや、その間の様々な動きや状況については、例えばインターネット上の様々な記述や、佐古和枝氏による一連の著作、『明日への文化財』47号(2001)、『考古学研究』などで確認することができる。本書は「弁護士」という立場を通して、諸省の状況などとあわせて記述されていることにその特徴があり、きわめて興味深く読める。

そして、遺跡保護を進めるうえで、裁判に頼らずに住民運動によって遺跡を守るという方針を基本にすえていくこと、裁判はそのための1つの手段という方向性は、例えば、住民運動などで、裁判だけに頼った活動のみでは目的に結実していかない現状をみると改めて気づかされる部分が多い。

私が今居住する徳島でも、開発をめぐる遺跡も関わる裁判訴訟も現在起こっている。また、近県でも、遺跡の指定解除の末に調査が実施される事業などもあり、悩ましい状態は現実として存在している。草の根レベルでの、文化財に対する多様な周知活動が、不可欠なことは間違いない。

では、あらためて、なぜ遺跡を巡る訴訟はなぜおこるのか、おこさなければならぬのか。その問いは果てしなく、重い。本書とあわせて、例えば、訴訟手続きを具体的ににつづった『難波宮跡の保存と裁判』(1980)や、『摂津加茂遺跡を守った』(2005)なども、あわせて読み返す時なのかもしれない。現在のところ本書は、考古学を専攻する大学図書館ではほとんど確認できないが、この機会に多くの公的機関に本書がもたらされることを期待したい。



## アルカ通信 No.115

発行日 2013年4月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp